國學院大學学術情報リポジトリ

〔講演録〕世界を異化することばの力　アフリカの吟遊詩人、アズマリ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川瀬, 慈, Kawase, Itsushi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001585

〔講演録〕

世界を異化することばの力
アフリカの吟遊詩人、アズマリ

國學院大學渋谷キャンパス　6号館B13教室
2023年10月7日（金）15時30分～17時
講演　川瀬　慈
司会・概要執筆　笠間直穂子

概要

吟遊詩人に相当する歌い手・語り手は、瞽女や琵琶法師などの伝統を有する日本をはじめ、古今東西、さまざまなかたちで人びとの暮らしに寄り添ってきた。国立民族学博物館教授の川瀬慈氏【図１】は、映像人類学者として長年、エチオピアをフィールドに、アズマリと呼ばれる吟遊詩人について研究を重ねている。その成果は数々の映像作品、そして『ストリートの精霊たち』（世界思想社、2018年／鉄犬ヘテロトピア文学賞）、『エチオピア高原の吟遊詩人――うたに生きる者たち』（音楽之友社、2020年／サントリー学芸賞／梅棹忠夫・山と探検文学賞受賞）などの著作に詳しい。

文学部講演会および外国語文化学科《多言語・多文化の交流と共生》プロジェクトの共催イベントである本講演会では、アズマリとはどのような存在か、また彼らの歌う詩はどのようなものなのかについて、多くの写真や映像とともにお話しいただいた。アムハラ語での朗誦、ドキュメンタリー映画「吟遊詩人―声の饗宴―」（短編版、17分）の上映も交えた臨場感あふれる講演。参加者は32名で、質疑応答では音楽評論家、文学研究者、詩人などが、それぞれの関心と結びついた質問を寄せ、客から歌い手への「投げ掛け」をふくむアズマリの演奏に見合う、深い交流の場となった。

【図１】川瀬慈氏

なお、本講演の翌年には、みんぱく創設50周年記念展「吟遊詩人の世界」が開催され、川瀬氏は解説書『吟遊詩人の世界』（国立民族学博物館、2024年）の編集を担っている。

（笠間直穂子）

吟遊詩人

各地を広範に移動して詩歌を歌い奏でることを仕事とする吟遊詩人は、古代からさまざまな地域に存在していました。一般に吟遊詩人というと、中世ヨーロッパにおいて存在したトルバドゥール、あるいはミンストレル、そのような宮廷楽士や大道芸人を指すことが多いですが、アフリカでも吟遊詩人的な歌い手の存在や語り部は、地域社会の中で脈々と生きてきました。私は22〜23年ぐらい日本とアフリカ北東部、エチオピアを行き来して、音楽をなりわいとする世襲の音楽集団をずっと追いかけてきました。特に、歌い手たちは地域の人々と豊かにやりとりしますが、私はこれらのパフォーマンスを映像作品にして発表することを、研究の中心に位置づけて取り組んできました。

本日はそのような集団の中で、ウマのしっぽの弦とヤギの皮の共鳴胴を使った弦楽器、マシンコを弾き語るアズマリと呼ばれる人々が、言葉をとおして世界を異化していく営み、地上の世界を読み替えて、異なる世界を立ち上がらせていく営みについて、考えていきたいと思います。

アズマリのパフォーマンスは非常に多様な社会的な状況において、もとめられてきました。歴史家の文献によれば、いにしえよりアズマリが多様な顔を持ち、さまざまな役割を担ってきたことが確認できます。アズマリは、王侯貴族のお抱えの楽士や道化師、社会批評家、庶民の意見の代弁者として活動をしました。あるいは、為政者によって、税の徴収係として雇われて働くアズマリもいました。例えば17世紀から18世紀まで130年ほど続いたゴンダール王朝の時代では、アズマリが庶民の声をまとめて、為政者、権力者に歌をとおして伝えて、行政の在り方を改善するように為政者に助言を行ったことが知られています。逆に、権力者のメッセージを、歌をとおして地方へ伝え歩いたことが知られています。テレビやラジオやインターネットが存在しなかった時代の、メディア的な役割をアズマリが担っていたと言えます。

戦場で兵士を鼓舞する者もありました。1930年代にイタリア軍が攻めてきたときは、侵略者に対して、歌をとおしたレジスタンス活動を繰り広げたことが知られています【図２】。1970年代、エチオピアは社会主義イデオロギーを中心に掲げた軍事政権の時代が到来します。そんなときアズマリは、政権のプロパガンダを、様々な民族の言語で、歌をとおして広報をする役割を務めたことが報告されています。

【図２】1930年代半ばにイタリア軍によって撮影されたと思われる写真（川瀬個人蔵）

これから写真や映像を見てもらいますが、現在もさまざまな地域社会の場で、歌い演奏するアズマリがいます。近年はグローバルなポピュラー音楽界、あるいは無形文化遺産をめぐる国際的なポリティクスにおいて、芸能の様式や自らの表象の在り方を柔軟に変えて、活動を展開させています。地域社会の音楽を担ってきたアズマリが、外部から激しく揺り動かされて、職能者からアーティストへと変化していく過程にあるとも考えることができます。

ここで、アズマリの話に行く前に、エチオピア北部の音楽のランドスケープについて少し考えます。皆さんにとって、音楽とは何ですか。音楽を行うとはどのようなことですか。芸術活動、創作、表現、自由な精神の発露、いろいろな説明が可能かもしれません。エチオピア北部の社会における音楽については、これらと異なった観点から捉える必要があります。

アムハラ語でゼマ（宗教音楽）とゼファン（世俗音楽）という対立概念があります。ゼマは神様からの贈り物というニュアンスがあります。この場合の神様は、1600年ほどの歴史を持つ、エチオピア北部の代表的な宗教である、キリスト教エチオピア正教会の神を指します。神様からの恩寵である宗教音楽こそが絶対であり、尊ばれるものという認識がひろく共有されています。反対に、世俗音楽はゼファンと呼ばれており、アズマリはゼファンを担う代表的な存在と定義付けられていました。

そのためアズマリは、自由な表現、芸術活動を行うアーティストとして認識さ

れることはなく、機織り、鍛冶、つぼづくり、皮なめし、銀細工などを行う職能集団と共に、手に職を持つ者として認識されます。アムハラ語で職能を意味するモヤという語があります。手に職を持つ者はモヤテンニャと呼ばれます。モヤテンニャは忌避される存在として、社会からは差別されてきた側面があります。モヤテンニャと通婚、婚姻関係を結ぶと、“家にひびが入る”という表現が用いられて、一般的には強く避けられてきました。日本で言う河原者あるいは河原こじきのイメージが近いのでは、と私は考えています。その反面、王侯貴族お抱えのアズマリが存在し、報酬として膨大な土地をもらう者もいました。あるいは、著しく武勲があった兵士のみが受け取る冠位を授かるようなアズマリもいました。

アズマリという呼称の語源は、神をたたえることを意味するザンマラというゲエズ語です。アムハラ語とも関わりがある、いわゆる典礼言語です。しかしながら、封建時代にアズマリがパトロンである諸侯を褒めたたえるのみならず、盛んにやゆ、批判をしていたことから、「アズマリ」という語は、本来の語源を離れて、「人を侮辱する者」、「冗舌家」、「乞食」、「意味のないことをたくさんしゃべる人」と、いうネガティブな意味合いを持つようになりました。アズマリという語は「音楽を行う人」という意味で用いられると同時に、人を罵倒したり、中傷する脈絡でも用いられます。

これらのネガティブなイメージに対して、アズマリは自らを、「死の床に伏した聖母マリアの苦しみを和らげるために歌った、天使エズラの子孫」であると主張します。アズマリは通常、一般社会からさげすまされ、ばかにされるような存在だけど、自分たちはエチオピア正教会の信仰における中心的存在である聖母マリアと関わりがあるというのです。自集団の出自の聖性を強調します。マリアが死ぬとき、天使エズラがやってきて、マシンコを奏でて歌い、マリアはその美しい調べにうっとりし安らかに息をひきとった、という伝説です。アズマリは、自分たちの始祖がエズラであることを歌で主張します。社会に対して主張すると同時に、自らにもじっくりリマインドするように歌いあげます。

アズマリの役割と演奏の場

ここから特に北部の地域社会におけるアズマリの役割、演奏の機会に関して皆さんに紹介していきます。かつては王侯貴族に仕える宮廷楽士のような歌い手がいたとされています。現在は主に酒場やさまざまな宴の場で歌うことが一般的です。さらに、結婚式でも歌います。エチオピア正教では男子が生後40日、女子が生後80日で洗礼を受けます。アズマリはその洗礼式にも呼ばれて歌います。家の新築祝いで歌うこともあります。アズマリの歌の特徴として、ほめ歌を歌って人を良い気分にさせることがあります。これは代表的なほめ歌ですが、私自身も気に入っていて、よくアズマリに投げ掛ける歌でもあります。少し読んでみます。

ተጨወት ሰለሞን ጨወታህ ያምረኛል
もっと話してよソロモン　なかなかいいユーモアのセンスしてるね

ከሆድህ ንብ የለው ካፍህ ማር ይገኛል
おなかにハチがいないのにあなたの口から蜂蜜があふれてくる

ある宴の場で、聴衆のなかにソロモンという青年がいたのですが、このソロモンにアズマリが歌いかけます。「なかなか良いユーモアのセンスをしているね。もっと話してよ。君のおなかにハチなんていないのに、口から蜂蜜が溢れ出てくる」。分かりますか？ここでは、「ユーモラスな話」を蜂蜜に喩えています。あなた（ソロモン）の話は蜂蜜のように甘い。だから話を止めず、もっと話してくれ、ということです。たった２行ですが、このような短い詩のクラスターがいくつも続いていくのです。吟遊詩人というと長めの叙事詩、叙情詩を延々と歌いかたるようなイメージがあります。アズマリは、どちらかというと、短い数行の歌詞を歌います。２行もありますが、大体は４行ぐらいの短い詩の塊を、歌いつらねていると言えます。

アズマリを語る上で、もう一つ重要な点があります。それは、聞き手からアズマリに向かって盛んに詩が投げられるということです。即興詩です。もちろんアズマリは聴衆の皆さんに歌を歌って聞かせますが、皆さんの側からもたくさん詩が投げ掛けられていくのです。アズマリはその詩を反復し、他の聴衆に聞かせます。時には聴衆同士の口論までが、アズマリを介してなされる場合もあります。このあとに皆さんにはアズマリのパフォーマンスを記録した映像をみていただこうと思います。

私はエチオピアに５年ぐらい暮らしました。最も長く滞在したのがゴンダールという北部の都市です。1600年代、ゴンダールには王朝が存在しました。６代の王が継承してこの都市を統治します。このゴンダール時代に宮廷で活躍したアズマリがいたのですが、現在でもゴンダールの周辺には、アズマリが集住する村が存在し、アズマリの活動が非常に盛んです。これからお見せする映像は日本語で言うといわゆる「門付け」に相当するパフォーマンスです。アズマリが新年、家々を巡って、民家の玄関先、軒先で歌います。

新年、お正月と言っても、エチオピアは暦が異なるので、新年は９月です。９月11日ぐらいがお正月で、その後は13カ月間の暦があります。９月11日の元旦は非常にめでたくて、このようにグループになって、アズマリたちが家々を回って、門付けを行います。これは男女合計で８人ぐらいだと思います。男性４人、女性４人です。家々をまわって、アムハラ語で、ウコンアデラサッチュ、あけましておめでとう、と言います。より厳密に解説すると「この新年の時期まで、われわれが元気でたどり着けて良かったね」といったニュアンスです。そのような感じ

で、皆さんの家の敷地に楽器をかかえてずかずかと入っていって、歌って祝福していきます。数分だけ映像を見てみますね。

アズマリによる新年の門付け

https://youtu.be/3dvriw3CcRE

今の短い動画の後半に、ある女性が演奏に対する謝礼である紙幣をべろりとなめて、アズマリの額に貼り付けます。皆さんはこんなふうにチップをもらうのは嫌だと思いますね。奏者のおでこに謝礼というかチップを付けるのが礼儀とされています。アズマリの演奏に対してこれをしなければ、皆さんのことを歌い手が婉曲的に中傷します。パフォーマンスの途中、ある程度のタイミングで、それなりに褒められたときや楽しい気分にされたときは、ポケットから紙幣を出して、アズマリのおでこに貼っていかなければいけません。でないと恥をかかされます。アズマリの歌の中で「けち野郎」と批判されることもあります。

アズマリは、このようにめでたい場に欠かせない存在であるため、エチオピアの地域や社会において、祝祭や宴会を彩る道化師、コメディアンとしてのイメージが強いです。しかし、同時にアズマリは、歌い語る声をとおして、世界を異化するコンダクターでもあるといえます。日常生活において、われわれが慣れ親しむ世界に対して、オルタナティブな異なる世界を提示する存在といえるのです。今、皆さんに連続写真を見せていますが、穀物を収穫している場です。10月から11月に収穫する、エチオピアの主要な穀物であるテフというイネ科の穀物があります。テフを収穫するときに、農家では、共同作業による刈り入れが行われます。アズマリは収穫の場に来て、収穫の場を戦場に見立て歌います。時折、銃声を模すかのような擬声を用いて、兵士たちが打ち合う、切り合う、血を流す戦場に読み替えていきます。銃声の模倣に急き立てられるかのように、農夫たちの跳躍が勢いを増していきます。なかなか見応えのあるものです。

また、これは私自身の30分弱の短い映像作品からの抜粋写真です【図３】。憑依儀礼ザールの現場です。コレとよばれる精霊を呼んで、精霊と人々がコミュニケーションを行います。

【図３】憑依儀礼の霊媒、『精霊の馬』より

人々は悩み事や、さまざまな願望を精霊に告げます。アズマリの演奏は、精霊という存在と人々を仲介するメディアです。一言で精霊と言っても、さまざまな性格、気質があります。名前も出身地も全く違います。精霊によって好きなリズムパターンやメロディーパターンが異なります。アズマリはそれぞれの精霊によって歌いかた、演奏をかえていきます。先ほどの映像にも出てきましたが、エチオピア北部のゴンダールという街は、フランスの詩人で民族学者、ミシェル・レリスが６カ月ほど滞在したことでも知られています。彼のゴンダールでの経験は『幻のアフリカ』という大著のなかで紹介されています。

ザールの儀礼の参加者はアムァムァキとよばれます。あたためる人という意味です。ザールにおいて、精霊を誘い出すために、アズマリの演奏を軸に人々が一体となって、眠っている精霊を揺さぶり起こして、歌や踊りで空間をあたためることが求められます。ただし、この際のあたためるというのは、温度の高低に言及する言葉ではない。光、音、匂い、煙によって、空間の密度を濃くするという意味合いがあり、それとともに、人々の意識の在り方を変えていくという意味を持ちます。

このような空間でアズマリが歌って、精霊を呼び起こしているというか、呼び覚ましている場面を、私の『精霊の馬』という映像作品から少し見てもらいます。

ザールは大体夜の20時に始まります。そして明け方まで延々と続きます。霊媒によってお気に入りのアズマリがいます。例えば本作の主人公である霊媒師は、作中に登場するアズマリと、10年間一緒にザールを行っています。アズマリは、霊媒が、どのような精霊を呼ぶか、どのようなやりとりを行うのか、非常に細か

い点まで把握しています。精霊に合わせて、演奏における、リズムやメロディのパターンを変えていきます。

『精霊の馬』川瀬慈監督、2012年

https：//www.youtube.com/watch？v＝49IbBZ9ILS0

現地では、アラビア語起源のファラスという言葉で、霊媒が表されます。精霊がファラスに降りるのを手伝うことが、アズマリの仕事だとされています。

アズマリの歌う言葉

ここからさらに、アズマリの言葉の使い方に踏み込んで話をします。皆様の手元にある配布資料は『エチオピア高原の吟遊詩人　うたに生きる者たち』という本の９章、10章の抜粋です。９章に関してですが、資料を確認しながら聞いてください。セムナ・ワルクという歌いまわしについて説明します。アムハラ語でセムナ・ワルクと言いますが、日本語に訳すと蠟と金という意味です。特殊な歌の歌いまわしです。この歌いまわしによって、人々に死についてのイメージを喚起させます。イメージという言葉を使いましたが、死を巡る観念を浮かび上がらせるという説明が、もしかすると適切かもしれません。アズマリのレパートリーの中でも蠟と金は、最も古くから伝承されてきた歌とされるゼラセンニャ（神にささげる歌）の中に顕著です。

酒場であれ結婚式であれ、どのような場でもアズマリが演奏を始める際は、まず一番最初に、男性の歌い手による独唱でゼラセンニャが数分間歌われます。曲に一定の拍子はなく、語りに近いです。この歌は数行で意味内容が完結する短い詩が連なっていきます。愉快な道化師であり、コメディアン的な存在のアズマリですが、この歌を歌うときだけは、なぜか非常に粛然と、言葉をかみ締めるように、じっくり歌います。

聞き手のほうはどうなのかというと、聞き手側は言葉の金鉱を掘り起こす作業を求められます。ここから、少し難しい説明をするので集中して聞いてください。聴き手は、歌詞の上っ面の情報を受け止めるだけではなくて、注意深く歌詞に耳を傾けて、修辞的なトリックを用いて言葉の奥の「金」の領域にリーチするのです。言葉を改変して、イメージの世界に深く潜っていくことが求められます。具

体的に蠟というのは、歌詞上で字どおりに理解される特定の単語や節、ひとまとまりの段落を意味します。一方で金というのは、蠟が徐々に溶けることによって表れ出る歌詞の深淵、イメージの世界を指します。実際に事例を見て解説します。

これは４行の歌詞です。

መልካም አገር ነው ጎንደር
ゴンダールは祝福された場所
ቤተክሲያን ስሞ ለማደር
人々は教会の活動に日々を費やす
አይቀርም እና ዳኝነት
裁きは避けることができない
ከተማ ሰው መግባት።
町の人が入ってくる

日本語の部分だけを読むと、たわいもない詩です。「ゴンダールは祝福された場所。人々は教会の活動に日々を費やす。裁きを避けることはできない。町の人が入ってくる」。これだけ聞かされても、特に４行目はちんぷんかんぷん。わけが分かりませんよね。この場合、４行目の黄色でハイライトした部分はカタマソウと言って、町の人という意味です。カタマが「町の」という形容詞で、「人」を表す名詞ソウをくっつけるとカタマソウ、「町の人」という意味です。ただ、カタマソウは同時に「（遺体を）土の中に葬る」という意味の動詞です。人が死ねば、土の中に入り、ジャッジメント、すなわち神による裁きを避けることができないという、イメージが浮かび上がってきます。

もう一ついきます。今度は、一つの単語を二つに分け、新たな意味を生成させます。

የዛሬ ዘመን ገበሬ
近頃の農民たちは
ምድር አያውቅም አስከ ዛሬ
農地に関してなにも知らない
ጭንጫ ነው ብለህ አትለፈው
ここは砂利混じりの土だと言って通り過ぎてはいけない
እረሰው አፈር ነው።
耕せ！　ここは土であるから

「近頃の農民たちは農地に関して何も知らない。ここは砂利混じりの土だと言っ

て、通り過ぎてはいけない。耕せ！　ここは土であるから」。蠟と金は、大体は４行目の最後のラインに宿ります。「耕せ！」は命令。アムハラ語でアラソウ。ここで、アラとソウを分けます。アラとソウに少し距離を持たせます。アラは感嘆詞で、日本語で言うと「あれ！」といったところでしょうか。先ほども出てきたとおり、ソウは「人」を表す名詞。「あれ」、「人は土に返る」という大意が導き出されます。

蠟の部分だけを見ていると、どうということもない詩です。砂利混じりの土だと言って通り過ぎるのではなくて、しっかりと耕しなさいという歌です。表面だけ見ていると、たいしたことのない歌のようです。しかしアズマリは「誰もが死を免れ得ない」、「誰もが土に返る存在である」ということを、この詩をとおして人々にリマインドするのです。具体的に明確なメッセージを伝えるというよりは、イメージの世界に導きます。聴き手はイメージの世界にダイブして、自らのイマジネーションでこの言葉をそしゃく→咀嚼して受け取ることが求められます。

次は、蠟と金が、詩全体にやどるもの。これは３行の詩です。３行の詩ですが、詩全体が蠟と金です。

ወልዱን　ዕግዝአብሄሪ　ሸማኔነህ　አሉ
神様は機織職人
የንተ　ሸማኔ　ሞት　ምኑ　ይነፋቃል
しかしながら　神様の機織りは下手である
በኋላ　እየሰራህ　የፊተኛው　የልቃል
前方で織ってゆくにつれ 手前でほどけていく

これは比較的にレアな詩です。「神様は機織り職人。神様の機織りは下手である。織るにつれ、ほどけていく」。神様は人、万物を創造する存在です。神様が人を創造することを機織りの仕事に喩えています。神様が機を織るにつれて、それはほどけていきます。次々と人を創造しても、人という存在はほどけます。つまり、亡くなっていくことを言っています。そのようなことを表しています。

本日はせっかくなので、どのような感じの蠟と金が歌われるのかについて実演しますね。「そこにつぼづくりの女性がいる」を歌います。そのまま「近頃の農民たちは」で二つ目の事例を歌います。その後は、三つ目の「ゴンダールは祝福された場所」です。三つの異なる詩を独唱します。少し恥ずかしいですが、歌ってみます。

※歌の実演

このような感じです。アズマリによっては、蠟と金が宿る箇所を執拗に繰り返

し歌います。聴き手が聴き逃さないためです。このような感じです。酒場、憑依儀礼、宗教儀礼、洗礼式、家の新築の場でも、蠟と金がちりばめられたゼラセンニャを必ず歌います。

アズマリベット

このように地域社会のさまざまな場で演奏活動を行ってきたアズマリは、1990年代の初頭ぐらいから、特にアジスアベバを中心とする都市において、アズマリ音楽専門の酒場というかクラブのような場所で歌うようになってきました。今まではいろいろな所へ移動して歌って、報酬をもらってきましたが、特定の店舗に所属するようになります。店によってはオーナーであるアズマリが、同僚たちに定額の給料を払います。この写真に写っている彼もそうです【図４】。

【図４】アジスアベバのアズマリ音楽専門店でのアズマリと客のやりとり

都市に定住してアズマリ音楽専門のクラブ、通称アズマリベット、で歌うアズマリが増えています。ここでは、比較的、安定した収入を得ることができます。かつ、海外のプロデューサーに出会う機会も増えて、ビジネスチャンスが広がります。アズマリが欧米でツアーを行って歌う機会が増えてきましたが、村落を拠点に活動してきたアズマリから見ると、アズマリベットで歌うアズマリの先輩は、憧れの的です。

アズマリベットで撮ったワンショットの映像がありますが、昨年、短編映画『吟遊詩人――声の饗宴――』にまとめました。皆さんに見てもらいます。17分弱の

映像です。皆さんは本日の冒頭の話を覚えていますか。アズマリのパフォーマンスにおいては、歌い手だけではなくて、聞き手が詩を投げ掛けるというものです。皆さんに特に着目していただきたいのは、９分ぐらいすぎてからでしょうか。お客さんたちがアズマリに次々と詩を投げ掛け始める部分。アズマリがその詩の一字一句をコピーして歌い上げます。お客さんが投げ掛けた詩に対して、アズマリが詩で返答することもあります。これからおみせする映像の後半にみうけられる詩は、エチオピアの政治や外交の現状を反映しています。

エチオピアでは2020年11月から、２年間戦争が続きました。かつて政権の中心にいたティグライ人民解放戦線（TPLF）を筆頭とする反政府軍と政府軍の戦いです。映像の中ではこの戦争に関する詩がやりとりされます。また同時期、新型コロナウイルスの世界的なまん延がありました。パンデミックについての詩も聴衆と歌い手の間でやりとりされます。過去と現在のエチオピアのリーダーである首相に対する批判も見受けられます。さらに、エチオピアが建設した、巨大なダムである大エチオピア・ルネサンスダム（GERD）をめぐる、エジプト、エチオピア、スーダンの３カ国による治水権をめぐる抗争についても歌われます。
では、『吟遊詩人―声の饗宴―』という17分の映画を上映します。

『吟遊詩人―声の饗宴―』2022年、川瀬慈監督

https://www.youtube.com/watch？v＝vCm_-T1yf-I

17分の映像のうち、後半の６分程は、詩のやりとりというか、詩をとおした議論と言ってもいいかもしれません。客がアズマリを通してお互いに褒め合うこともあれば、けなしあうこともあります。庶民の気持ち、社会や政治情勢をアズマリの歌が表します。アズマリの歌は、エチオピア国内の情報だけではなくて、国際関係、国際情勢をあらわす鏡でもあります。

歌詞のなかで「繁栄」という言葉が出てきました。エチオピア与党は「繁栄党」と言います。Prosperity Party、繁栄党（アムハラ語で“ブルツグンナ”）です。客から投げかけられた詩は「この状況で繁栄なんて、ふざけるな、笑わせるな」というストレイトな政権批判です。あとは、アビィ・アハメド首相による緑化運動、植林キャンペーンへの鋭い批判の詩もありました。昨年、砂漠化の防止や、森林を取り戻す緑化運動が大々的に行われました。植林をするのはいいけれど、そのときにたくさんの人が強制的に土地や家を追われて、移住させられたのです。

アビィ・アハメド首相が行った緑化キャンペーンに対する、批判です。非常にクリティカルな話のやりとりがされると同時に、ときと場合によっては、もちろん政権を称賛するような詩も見受けます。さまざまな意見が沸き起こります。アズマリの歌は様々な意見がとびかうフォーラムです。2020年から2022年の戦争のときも、アズマリベットで歌をとおした政治的な議論が、非常に盛り上がったという報告を受けています。

アズマリ自身の本音はどうでしょうか。もちろんアズマリ自身がとてもクリアに政治的な主張を述べるときもあります。この映像の後半では、アズマリが、エチオピアという国に対する失望などを明確に歌っていましたね。

秘密の言葉

以上がアズマリの、主に歌詞についての話でしたが、「世界を異化する」というキーワードにおいて、もう一つ重要な点があります。それは何かというと、皆さんに配っているレジュメの10章部分。「秘密の言葉」についてです。アズマリは集団内部でしか理解されない特有の隠語を共有しています。それはアズマリ同士のコミュニケーションの中でのみ用いられて、アズマリではない者に教えることはタブーとされています。20世紀なかばに、アメリカ人の言語学者Wolf Leslauがアズマリ隠語Azmari Argotの調査をしています。彼の論文にはアズマリ隠語の約６割が、アムハラ語を特定のパターンに基づいて変化させた語句であると結論付けています。

隠語は、音楽をベースにした経済活動を他集団に対して、優位に展開させていく上での集団にとっては「不可欠な技」であると捉えられます。例えば私と笠間さんがアズマリの夫婦で、私が楽器を演奏していて、笠間さんが目の前のお客さんに歌いかけるとします。私が「ようこそハヤシ君。この酒場へよく来てくれました。ようこそ！」と歌います。そして歌詞と歌詞のセンテンス間を縫うようにして、私が妻に「あの客はポケットにそれほどお金を持っていないので次の酒場へいこう」。そうすると妻が「いや、持っているはずだ、もう少しねばって、歌って彼からチップをひきだそう」と言うのです。こんな感じで、歌詞と歌詞の間を縫うようにアズマリたちは隠語でコミュニケーションを取ります。

隠語の代表的なもののほとんどは、言葉遊びのように母語のアムハラ語の語彙を変化させて、隠語を生成させます。例えばアムハラ語で「夜」は「マタ」と言います。この「マタ」を「タマ」とひっくり返すとアズマリの隠語になってしまいます。隠語って、その程度なのかとがっかりしないでください。こんな言葉遊びのように生成された語彙でも、一つのセンテンスにたくさんちりばめられると、まるでわけのわからないことばになってしまうのです。一つの日本語のセンテンスの中に、これらの語が四つ、五つ並ぶことを想像してみてください。聴き手は、

まったく理解できなくなるでしょう。

ただし、隠語は隠語です。私が研究でアズマリたちの集団に入ったときのこと。私が隠語をアズマリたちから学ぼうとすると、大人のアズマリたちは、まさに敵意をむき出しにするというか、絶対に私に教えませんでした。じゃあどうやって、隠語を覚えたのかというと、子どものアズマリたちとのやりとりから、です。子どものアズマリたちが私の部屋を訪ねてくるようになりました。こちらが聞かなくても、次々と秘密のことばを教えてくれるようになりました。私がある程度のレベルに達して隠語を話すようになると、逆に驚くほどあっさり、大人たちは、私が隠語を話すことを許してくれるというか、変な話ですが私を受け入れてくれるようになりました。アズマリの隠語に関しては、もっと深く研究をしていきたいと思っています。

質疑応答

関口義人氏　私も30年余り、ある一つの民族をずっと追いかけてきました。その中で、今日は分からないことがありました。アズマリは少数民族ですか、職能集団ですか、被差別集団ですか。つまり、社会的に差別されている人なのか、あるいは彼らは血族的なつながりはどうなのか、できればその辺りの経緯を教えていただきたいです。

川瀬　アズマリは民族ではありません。アズマリは職能集団で、血筋を重んじる集団といったところです。自集団を指してザタという言葉を使います。アウトサイダーはブガと言って排除し、自分たちと分けます。民族ではありませんが、出自を重視する職能集団です。アズマリは他称です。本日も少しだけ話しましたが、社会においてネガティブな印象が持たれているので、普段、アズマリたちはそれほどこの呼称を使いたがりません。

関口　映像から見えてくるかぎり、私が接している民族などでは絶対にあり得ない表情や空気です。「こんなことを言ったら大変だろう」という発言ばかりが続きました。被差別集団にはあり得ないリラクゼーションがあります。この人たちは本当に自分たちのことを嫌がっているのだろうかと思いました。むしろ、楽しげに感じる部分もありました。もちろん、外部の人間が見ていないところでは、楽しげに過ごすことはどの集団でもあるでしょうが、私の場合は命がけになって、危険にさらされることが多いので、それと比べると、いま映像で見た光景からは、そうした空気は察しづらい。アズマリの場合は、嫌がっているけれど、仕方ないぐらいの感じで、それなりに気楽な、のんびりとした環境を謳歌していると感じました。その辺りはどうですか。

川瀬　特に首都で活動しているアズマリたちは、そこまでうしろめたい意識はありません。北部のゴンダール等のより保守的な社会では職能集団に対する差別意識は明らかに強まります。アズマリとの通婚を忌避する傾向も北のほうではより顕著です。関口さん、せっかくなので、簡単に自己紹介をお願いします。

関口　1985年にパリでジプシーという民族に出会って、それからもうすぐ40年になります。35カ国のジプシーに会ってきました。来年はアメリカやブラジルのジプシーを訪ねます。ジプシーは差別されて、いじめられて、石を投げられるのが常識だったのに、これから私が訪れる国のジプシーたちは、差別をあまり体験していないのではないかと思います。アメリカには170万人のジプシーが住んでいます。それに関して言うと、アズマリに関する統計的な数値はありますか。

川瀬　あるアメリカの民族音楽学者が20年ほど前に、アズマリの総数4000人と言っていたと思います。ただし、それがアズマリを指すのか、ザタを指すのかは全く違う話です。はっきりとしたことはわかりません。

関口　私が追いかけているジプシーは国際連合が取り上げて、データをはっきりとつかみ始めています。私もそれに多少、協力しています。彼らのことは世界で知られ、理解されるようになってきています。昔は水をかけられたり、石を投げられたり、あるいは殺されたりすることもあり、ヒットラーによって何十万人も殺されましたが、今後はそういうことはないと思います。果たしてアズマリはそういう人たちとは違いますか、どうですか。立ち位置がはっきりと分かりません。

川瀬　ゴンダールという古都で、フィールドワークを始めた当初、カメラを構えてアズマリを追っかけている私まで石を投げつけられたことを覚えています。ただし、20年以上の月日がたって、当集団に対する社会の差別意識も徐々に薄れてきていると感じます。

中村和恵氏　隠語の話を大変興味深くお聞かせいただきました。職能集団だからこそ隠語が用いられるのだろうと思いますが、同時に幾つかの先住民族の方々、特にオーストラリアの先住民族のことをあわせ考えておりました。オーストラリア先住民族の場合、秘密とされる事柄がいろいろあります。それをかれらがどこまで外部に公開するのか、どこまでどのように研究者が立ち入っていいのか、難しいところがあります。川瀬さんは偶発的に子どもを通じて知るようになった事柄を大人に試してみて、結構受け入れられたとのことですが、そういう展開がナチュラルに、立場に関係なく起きることについて、大変興味深く感じました。そこでちょっと本筋からずれてしまう質問です、すみません。隠語のほかに、アズ

マリが内緒にしていることはありますか。例えば本当の名前は秘密にする、といったことはあるでしょうか。

川瀬　重要な秘密は、隠語だけでしょうか。日本の芸能の文脈において、奥深いわざの世界を、アウトサイダーにあえて伝授しない、という話を聞きますが、アズマリに関しては、そういうことはありません。

参加者　先ほど「蠟と金」で紹介された詩があります。このような詩の長さや韻について、ある程度は形式やフォーマットがあって、歌われているものなのかどうか。あとは、特に酒場等でお客さんが詩を投げ掛けますが、これもしっかりと詩としてのフォーマットがあって投げているものなのか、それとも、その場の思いつきの言葉を自由に言っているものなのかについて知りたいです。

川瀬　お客さんが投げ掛ける詩に関して、そこまでフォーマットは求められません、しかしながら押韻の規則はそこそこ守られます。脚韻が重視されます。蠟と金を含む詩は、４行ぐらいの短い詩の塊が連なっていきます。お客さんがなげかける詩の多くは、即興詩が多いのですが、僕のように、詩をいくつか仕込んで、準備して酒場に持っていくような客ももちろんいます。

乙益由美子氏　詩の朗読にとても興味があります。きょうの吟遊詩人の方たちが、どのような様子なのだろうという興味が非常にあって来ました。先ほどのショートフィルムで、最初、徐々に空間が変わっていきました。店の中の人たちは現代的な場所にいますが、彼が言葉を発し始めると、まるで草原の草の中というか砂漠というか、そのような所に皆がいるような感じの雰囲気になって、それから展開されていく感じがありました。これが先生の言っていた異空間ということなのかと思いました。当たっているかは分かりませんが、そのように感じました。あのような詩のやりとりは、慣れていないとできないと思います。例えばあの店にいるのは皆、大人ですが、もしかすると、草原のような所で、子どものときからあのようなやりとりをしてきて、結果、あのようなやりとりができるようになったのか。もしかするとこの方たちは、言葉の鍛錬、あるいは学習をしているのではないかと思いました。感覚的には大縄跳びに入っていくような印象がありました。リズムと間合い、しかも韻を踏んでいます。簡単には入っていけないはずだと思います。子どものときから訓練がある、別の歌があるなど、そのようなステップがあるのかどうかについて伺いたいです。

川瀬　教育の現場で特に指導やレッスンを受けて、詩を学ぶということはないです。ただし、最初に見せた映像のように、遊び、宴、祝祭の場でおぼえていくと

いうかんじでしょうか。リードを歌う存在がいて、それに対して皆が追いかけます。コール・アンド・レスポンスですね。詩を作って、掛け合う遊びもあります。指導、教育という文脈で体得していくのではなくて、遊びながらさまざまな場で自然に習得します。ただし、最後の３本目の映像を見て、気付かれた方もいるかもしれませんが、詩の創作や「投げかけ」が、不得意な人もいます。

新井高子氏　いろいろな話が面白かったです。「蠟と金」のところで、今の言葉で言うと蠟がテキストで、金がそこから出てくる別のイメージということですよね。機織り職人の布がほどけていく、そのイメージをただ描くのが面白いのではなくて、そこから、人は死んでしまうことを思う、それが金だということでしたね。そうすると、「言ったこと」と「思ったこと」が違うということを、言葉の魔術として、魔法のように思う感性があるということですか。

川瀬　そのとおりだと思います。

新井　これは日本のさまざまな芸能の奥にも本当はあるんだろうと思います。なぞなぞ、あるいは私たちが詩を書くときのメタファーの源流が、実はこのような投げ掛けや謎掛けの話芸にあるのかなと……。蠟と金の話を私自身も深めたいと思いましたが、これは魔法だという意識が皆にありますか。

川瀬　魔法という捉え方はしていません。面白いのは、正解をもとめないことです。詩を通したイメージの多元性が理解されています。それぞれがそれぞれのイマジネーションでイメージの大海を航海する。明確なメッセージを受け取る、といったものではありません。

新井　たとえば日本人が「犬も歩けば棒に当たる」と聞くと、でしゃばるとよく災難に遭うというふうに意味が定型化していますが、機織り職人の詩については、皆がこのように思うべきものというふうになってはいないということですか。

川瀬　このように思うべきとまでは言いませんが。死が訪れることを、詩を通して、生き急ぐ人々に、ほんわりとリマインドする、といったかんじでしょうか。

新井　ともあれ、アズマリの歌を聞いて、最も深い感動を感じるのは、歌っている歌詞ではなくて、歌詞からひとつジャンプした世界を各自が思い描けるかどうかなんですね。

川瀬　そのとおりです。蠟と金の詩を聞いて泣く人もいます。日本語で解説する

と、その程度のことなんだ、と思われるかもしれませんが。歌をかみ締めて泣くような人もいます。ある種の感情をかきたてるのかもしれません。

笠間　蠟と金を歌う場が、死を思う場であることは共有されていますか。

川瀬　蠟と金を通して、為政者を批判するようなこともありますが、蠟と金の大部分のテーマは生と死に関するものです。これが、死の存在を想起させる、ということは広く共有されています。